

夜間主科目「基礎読書法」での試み

－ 授業 5 回分での口頭発表 －

井 上 次 夫

Experimental Teaching Method at Evening Course Class:
Oral Presentations over 5 Lessons at “Introduction to Reading Method”

Tsugio Inoue

(Faculty of Cultural Studies, University of Kochi)

要 旨

本学の平成27年度文化総合系（夜間主）科目「基礎読書法」は、教員3人が授業の各5回を担当するオムニバス形式で実施した。筆者担当の授業5回分では、受講者37人全員が文献内容に基づく個人別の口頭発表の経験ができるように授業計画を立てた。そして、テーマがある発表、学びがある発表、個人が行う発表という3点を基本方針として5回分の授業内で口頭発表を行った。そこでは、限られた授業回数の範囲ながら、受講者は事前準備、口頭発表、質疑応答、レポート提出という一連の学習活動を達成した。その結果、筆者は授業者として口頭発表に向けての準備段階からの周到的準備の必要性を改めて痛感するとともに、夜間主科目における口頭発表を軸とする授業の必要性を再認識し、その効果を確信することができた。

キーワード：夜間主専攻、オムニバス、口頭発表、基礎読書法

Keywords: Evening course class, Omnibus, Oral presentation, Introduction to reading method

1. はじめに

平成27年度より高知県立大学文化学部では教育内容として言語文化系、地域文化創造系、文化総合系（夜間主）の3系を中心とする新カリキュラムを導入している。

「基礎読書法」は平成27年度文化総合系（夜間主）1年生対象の後期2単位の科目であり、3人の教員（ローレン・ウォラー、井上次夫、三浦要一）がそれぞれ5回ずつ授業を行い、順に引き継いでいくオムニバス形式で実施した。そこでは、シラバスの授業概要にある「古典的な著作を取り上げ、受講者同士で読後の感想、疑問、意見を交換しながら内容の理解を深めるとともに、書物が担ってきた大きな役割についても学んでいく」ことを目的に、オムニバス1では授業オリエンテーションの後、

主に古典文学に関する単行本の内容について要約を行わせ、筆者担当のオムニバス2では日本語に関する新書の内容整理に基づく口頭発表を行わせた。その後、オムニバス3では建築に関する文庫本の読解に基づく意見交換及び議論を行わせた^{注1}。

本稿では、筆者担当のオムニバス2での授業実践を報告し、授業5回分でどうすれば受講者全員が読書に基づく口頭発表ができるか、文献内容の理解を深めることができるかについて検証する。

2. 授業実践の概要

2. 1 対象

「基礎読書法」における授業実践の対象学生は、文化総合系（夜間主）の受講者37名である。内訳は、学年別では1年生30人、3年生6人、4年生1人（3年生・4年生は編入生。以下、高学年生）、性別は男16人、女21人、年齢別にみると18歳から60歳代までの幅があった。

使用文献は、金田一春彦『日本語』新版（岩波新書）である。これは上・下2冊を合わせて「序章・I～Ⅶ章・終章」の9章構成になっている。口頭発表は、夜間主学生の事情に配慮し、授業時間外での打合せ時間を必要としない個人別発表とした。このため、2回目の口頭発表からは文献の同一部分を2人の学生がそれぞれ発表することになるが、これは文献内容の理解を深めることにもなると見込んでのことでもあった。分担部分は、内容の難易度や分量（頁数）を考慮して上・下の2冊から筆者が適宜、21部分を選び出し、受講者37人に次のように配当した。

- ① Ⅲ「語彙から見た日本語」一～五：5人（1人ずつ配当）
- ② Ⅲ「語彙から見た日本語」六～十：10人（2人ずつ配当）
- ③ Ⅳ「表記法から見た日本語」一～六：12人（2人ずつ配当）
- ④ Ⅵ「文法から見た日本語（二）」一～三、Ⅶ日本人の言語表現一・二：10人（2人ずつ配当）

2. 2 授業計画

筆者が担当した授業5回分（1回90分間）の授業構成を次に示し、授業計画を表1に示す。

- （第1回）授業案内＋連絡
- （第2回）口頭発表＋講評＋連絡
- （第3回）口頭発表＋講評
- （第4回）口頭発表＋講評
- （第5回）口頭発表＋講評＋まとめ

1年生の大半が大学での口頭発表は未経験と予想されたので、1回目の口頭発表がモデル発表となることを意図して高学年生5人を指名した。2回目以降は、出席名簿順に授業1回に10人又は12人を配当し、1人につき発表時間を5分間、質疑応答2分間の計7分間とし、残りの時間は講評を行うことにした。受講者には、口頭発表実施のためのプリントと、聴衆としての学びを促すための記録表などを配付し、筆者の授業5回の終了後にはそれらを綴じれば提出レポートとして完成できるように工

表 1 担当 5 回分の授業計画

授業	発表人数	構成内容
第 1 回		授業案内：基礎読書法とは、口頭発表の方法、分担連絡など
第 2 回	5 人	口頭発表①（5 部分を 4 年生 1 人と 3 年生 4 人、質疑応答）、講評、連絡
第 3 回	10 人	口頭発表②（5 部分を各 2 人、発表 5 分間、質疑応答 2 分間）、講評
第 4 回	12 人	口頭発表③（6 部分を各 2 人、発表 5 分間、質疑応答 2 分間）、講評
第 5 回	10 人	口頭発表④（5 部分を各 2 人、発表 5 分間、質疑応答 2 分間）、講評、まとめ

夫した。具体的な資料は次の①～⑤である（論文末【付録】参照）。

①レポート表紙 1 頁、②発表構成表（序論・本論・結論・質疑応答） 1 頁、③発表原稿用プリント（分担部分・テーマ・内容記述欄） 1 頁、④発表後プリント（自己評価 5 段階・記述評価欄） 1 頁、⑤発表会記録表（発表部分・氏名・興味及び疑問記入欄各 1 行・自分の質疑などの発言の有無欄・各回の振り返り記入欄） 4 頁。以上の計 8 頁を A 4 版の両面印刷 4 枚にして配付。

授業の基本方針としては、口頭発表には発表テーマがあること、発表を通じての学びがあること、受講者全員が個々人で口頭発表することとした。

2. 3 口頭発表までの授業

受講者による実際の口頭発表に向けて、第 1 回の授業と第 2 回の授業前半の時間を使用してパワーポイントとプリント資料を用いながら説明を行った。

第 1 回の授業では、筆者の「基礎読書法」における読書の目的が娯楽・楽しみや教養・学びではなく、情報収集・調べること及び口頭発表・伝えることにあることを説明した^{註 2}。なぜなら、真理の追究である学問研究の基盤が、テーマを設定し、そのテーマに即して情報収集・整理すること、自分の考え・意見を持つこと、事実・データ・調査結果などの根拠となる情報を示すこと、それらを基に新たな知見を正確かつ論理的にわかりやすく表現すること、そして、他者に正確かつ効果的に伝達することにあるとすれば、大学で課されるレポート・口頭発表においてはまず情報収集力が必要になるからである。つまり、情報収集としての読書は、レポート作成、口頭発表における論証のためにきわめて重要であるという認識に至る。そのため、受講者に対しては「他者に伝えるために文献を読む」と表現して伝え、口頭発表の基礎としての読書では、限られた期間内に文献を読み、自らテーマを設定し、必要な情報を収集・整理して報告することが求められていると説明したのである。

次に、発表に向けての具体的な準備のうち、受講者が提示するテーマについて説明した。例えば、「～について」や文献の章や節の見出しの引き写しは不可とし、「～か」という疑問文形式にすることを推奨した。具体的には「日本語の語彙は多いか、少ないか」「日本語の語彙は構成からみるといくつに分類できるか」「日本語に自然関係の語彙が多いのはなぜか」「人間関係の語彙における日本らしさとは何か」などを例示し、関心を引くような分かりやすいテーマの付け方を勧めた。

それから、口頭発表の方法について「発表構成表」（付録②）に即して説明を行うとともに「発表原稿用プリント」（付録③）の作成について説明した。さらに、口頭発表の手順やリハーサルの点検

表2 「口頭発表の手順」と「リハーサルの点検事項」

口頭発表の手順	リハーサルの点検事項
構成＝発表5分間＋質疑応答2分間	実際に発表し、時間（5分間）を計る
（司会）発表者紹介 1. 紹介後、名前を言う。 2. 担当の章・節を言って一礼。 3. テーマを述べ、簡単な説明。 4. 口頭発表を行う。 5. テーマに回答し、締めくくる。 （司会）質疑応答	1. 発表の所要時間は適切か。 2. 聞いた場合、理解しやすい表現か。 3. 話してみて、言いやすい表現か。 4. 話す速さや声の大きさは適切か。 5. 話す姿勢、視線、態度は適切か。 6. 内容の補足や削減は必要ないか。 7. 質問の予測と回答の準備をしているか。

事項についての説明も加えた。表2参照。

第2回の授業では、高学年5人がⅢ「語彙から見た日本語」一～五の口頭発表を行った。5人の発表者は、準備期間が1週間と短いながらも、それまでの各人の経験を生かして口頭発表を行い、以後の受講者の発表モデルとなった^{注3}。なお、発表者による発表原稿の読み上げを発表レジュメなしに聞くだけでは内容理解が困難であると予測されたため、予めQ&A形式でQ1.やQ2.を作成しておき、第2回の授業後半で説明を加えた。以下に、Q&Aの例をいくつか示す。

Q1. レジュメを使用したいのですが…

A 火曜日の午後5時半までに5F（学部事務室A515）に各自が作成したレジュメ原稿を持参し、印刷依頼の手続きを行う。その後、原稿コピーはA520室のドアポストに投函する。レジュメは水曜日の授業までに受け取り授業前にクラスで配付する。枚数はA4、1枚にまとめる。なお、レジュメを使用する場合、年月日、担当部分（項目・頁）、発表者名などを明記する。

※このレジュメは「発表原稿用プリント」とは別扱いのため、評価対象としない。

Q2. プロジェクターを使用したいのですが…

A 各自でプレゼンテーションソフトのパワーポイントなどで作成してください。そして、水曜日の午後5時半までに各自のUSBメモリーをA520室へ提出してください。動作確認をして、授業で返却します。※スライドは5枚以内とする。

Q3. 発表当日は仕事で欠席予定なのですが…

A 欠席予定が分かたらすぐに、井上に連絡し、交替してくれる人を探して依頼してください。相手が見つかり次第、再び井上へ報告して下さい。どうしても交替相手を見つけるのが難しい場合は早急に相談して下さい。

Q4. 発表時間のことが不安なのですが…

A まず、発表準備が不十分だと時間が余ります。次に、準備したことをすべて発表しようとする時間が足りなくなります。まずは「発表構成表」を練ったうえで、リハーサル（予行演習）をして内容や時間などを修正、調整して下さい。

Q5. 成績評価が気になるのですが…

A 成績は大きく、①受講状況、②口頭発表、③質疑応答・意見交換などの発言、④提出レポートなどで総合評価します。そのうち口頭発表は、発表の工夫・態度・内容で評価します。その際、発表内容が聞き手にどの程度、分かりやすく効果的に伝わったかがポイントになります。

Q 6. 最終的な提出物は何ですか。

A 最終的な提出物は、既に配付した「基礎読書法レポート」の完成版です。表紙を上にして4枚の左上を綴じて提出します。口頭発表で使用した資料などをA4サイズで追加してもかまいませんが、提出物の評価は「基礎読書法レポート」4枚8頁のみを対象に行います。提出先と締め切り日については後日連絡します。

こうして、第3回以降の授業は受講者の口頭発表と質疑応答、教員の講評で授業を構成した。最後となる第5回の授業では口頭発表・質疑応答、講評の後、授業者が授業5回分のまとめを行った。

3. 授業の実際

筆者は、担当授業の5回分で受講者37人全員の口頭発表を計画した。その結果、長欠学生1人と仕事の都合による欠席2人の計3人を除く受講者34人が口頭発表を行った。そして、最終の提出課題「基礎読書法レポート」（学生レポート。以下同じ）は長欠学生1人を除く36人が提出した。

以下、授業の実際について学生レポートの記述内容を用いながら検証していく。

3. 1 準備段階

筆者が担当するオムニバス2の授業で扱う文献についてはシラバスに記載してあったが、念を入れてオムニバス1の教員を通じて受講者に対し、事前に文献を入手して読んでおくことを連絡した。しかし、筆者の第1回の授業において準備状況を確認したところ、実際に文献を入手し、計画的に読み進めてきた受講者はきわめて少なかった。この点、このようなオムニバス科目においては、特にオムニバス2や3の担当教員は科目の開講初日の授業ではそれぞれ時間を確保し、受講者に連絡事項や授業内容の説明などを具体的かつ明確に行っておくことの重要性を改めて指摘しておきたい。

特に、筆者は第1回の授業で、初めて文献の読みに基づくテーマのある口頭発表を個人別に実施することを説明し、受講者にその担当部分を連絡した。このため、1回目の口頭発表に指名された受講者は準備期間が1週間と短く、レジュメの準備などが間に合わないことが生じた。今回はそれを見込んで、高学年生に1回目の発表を指名したが、上述したように、科目の開講初日に必要な時間を確保して十分に説明しておけば解決できたと思われる。一方、学生レポートからは、「自分の発表まで期間の余裕はあったが、結果的に実際の準備時間の確保が難しかったため、最初に分担が決まった時点からすぐに発表準備に着手すべきだった」という反省が見られた。口頭発表の実践に向けては授業者も受講者も早期着手の重要性を肝に銘じなければならないといえる。

また、発表までのリハーサル（予行演習）の重要性を強調したにもかかわらず、学生レポートからは「口頭発表は、文献を読み発表原稿を作成すればできるものと考えてリハーサルを行わなかった」

「実際の発表では時間配分、発表原稿の読み上げなど随所に不備が出たため、必ずリハーサルを準備段階に組み入れるべきだった」という反省が見られた。この点については、毎回の授業後には次回の発表者に対してリハーサルの実施を指示することで改善が期待できると思われる。

3. 2 発表段階

今回の口頭発表では受講者に「発表構成表」(付録②)に基づき作成した「発表原稿用プリント」(付録③)による発表を求めた。すなわち、文献の分担部分を読んで単に内容を整理して報告するのではなく、発表者がある読解内容を踏まえて自らのテーマを疑問文形式で設定し、それに回答し解決を図るという展開での発表を要求したのである。そのために、「口頭発表例」(表3)を示した。

表3 口頭発表例

【冒頭】

こんばんは。〇〇〇〇です。(名のる)

これから、第1章「世界のなかの日本語」の発表を行います。(一礼)

発表テーマは「Q：日本語は世界の中でどのような言語か」です。(ゆっくり)

【序論】

実は、これまで私は、日本語というのは世界の中でも特異な言語だと思っていたのですが、今回、本書を読んで、日本語について日本語を特異だとする説がある一方で、そうではないとする説があるということを知り、驚きました。本書によると、言語学者は多くが後者、つまり日本語は特異な言語ではないとする説に傾くようなのです。しかし、日本語は平凡で、何も特色がないというわけではありません。世界の中の日本語という観点から日本語の特色を考えてみることはできますし、また大切なことだと思います。～～～

【本論】

さて、本論ですが、まず、日本語は、～～～

次に、日本語は方言の違いが大きいと言えます。言い換えれば、位相の違いというのが多様で、大きいのです。例えば、～～～

それから、日本語は言語としての孤立性が高いわりに、多くの使用人口があります。また、他言語との交渉は少ないほうで、あったにしてもそれは語彙面に偏り、言語の基本的部分には影響を受けることはありません。例えば、～～～

【結論】

こういうわけで、日本語は、まず使用人口の多さ、次に言語の経済力といった形式の面においても、また漢字の効用、そして助詞といった内容の面においても、世界の中の有力な言語だといえることになります。それから、～～～

最後に、これまで見てきたことから、今回のテーマの「Q：日本語は世界の中でどのような言語か」について答えるとなると、「A：日本語は、世界の中で特色を持つ、有力な言語の1つである」ということになります。以上で、発表を終わります。ご清聴、どうもありがとうございました。

すると、発表者の多くは、各自のテーマを設定し、それに回答することを意識した構成で口頭発表を行った。しかし、一方で、そもそもテーマを設定していないままの発表、問題意識が希薄なテーマ設定のために文献内容の整理だけで終わった発表が散見された。その結果、学生レポートでは、テーマを設定して行ったタイプの発表に対し「文献の内容に基づき、自分で内容を広げて調べ、掘り下げて考察した発表は、聞く側としても自ずと理解が深まった」という肯定的な評言が目立った。一方、特にテーマを設定せずに行われたタイプの発表に対しては「内容の要点はよく分かったが、自分の視点がなくて何を伝えたかったのか分かりにくかった」のように、内容の要点整理の段階で終わっている点に対する不満の評言があった。

次に、発表方法については、口頭発表だけでなく、レジュメ・板書・プレゼンテーションソフトを交えて行う方式を説明し推奨した。しかし、2回目の口頭発表までは準備期間の不足もあったと思われる、何も使用しない「口頭だけ」の発表が多かった。実際にそれらを聞いてみると、聞き手側には聞くことに相当の集中力を要するだけで、発表内容の理解は進まなかった。また、発表者側にも伝えたい内容がよく伝えられなかったという反省があった。そのため、3回目からはレジュメを準備することに変更し、新たにスライド（図1）を作成し「Q1. レジュメを使用したいのですが…（前出2.3）」について再び説明した。すると、その後は、多くの発表者がレジュメを準備するようになった。以上のように発表方法は当初、発表者に一任していたため、発表法は口頭発表のみ12人、レジュメ使用17人、パワーポイント使用1人、レジュメとパワーポイント使用4人、という結果になった。今後は、発表者には当初からレジュメ作成を課し、口頭発表に活用させることが望ましいといえる。

なお、学生レポートからは、一般的な発表技術の知識が不足していたという反省も多くあった。この点については今回の授業で十分に扱う時間的余裕がなかったのだが、受講者が自他の発表実践を繰り返し経験する中から自然に、声の大きさ、話すスピード、話し方などの音声面、発表の内容構成、時間配分、説明の仕方、発表方法など発表技術への気づきが見られたことを付記しておく。

レジュメの構成 冒頭部分

発表年月日「基礎読書法」（前期・水曜6限）於A106
担当部分（ページ）

テーマ・主題

所属・番号・氏名

1. 項目
(1)
①
②

Point! 番号、箇条書き

1. 日本語表記の特色
(1)
(2)

2. 漢字の長短
(1) ①
②

3. 漢字と送り仮名

4. 結論
〈参考・引用文献〉

図1 「レジュメ作成」の説明スライド

3. 3 発表後の質疑応答・評価

口頭発表の後には、質疑応答の時間を短いながらも2分間設けた。これは、発表内容についての理解の確認・定着はもとより質疑応答の方法の習得をも意図したためである。それに伴い、質疑応答での発言内容を例示した。表4参照。この質疑応答の時間は聞き手側の疑問や意見、感想などを通じて発表者と意見交換を行う機会の場合として位置づけた。司会は、授業者である筆者が行った^{註4}。

こうして、聞き手側には発表後の質疑などの発言に備えて発表内容をよく理解しようと努めることの重要性が認識され、聞く姿勢が変わってきた。そして、聞き逃した点や理解が不十分な点、興味を持つ点などが見え始め、それに関する発言も生まれてきた。すなわち、単に発表を「聞く」ことから、発表後に発言するために「聴く」ことへの意識改革があり、主体的に学ぶことに結びついた。

一方、発表者は、聞き手側からの発言への応答に備えて発表内容をよく吟味することの重要性が認識された。そして、聞き手側が持つと思われる疑問や意見などの予測を行うようになり、分かりやすく伝えようという自覚が生じた。すなわち、単に発表を「する」ことから、事前に質疑を予想し応答する目的で発表を「工夫する」ことへの意識改革があり、主体的な取り組みに結びついた。

発表する側、聞く側のいずれの立場においても質疑応答の時間を有意義なものとしようという姿勢が必要であり、質疑応答、意見交換をすることで多様なものの見方・考え方や新たな課題に気づくなど発表内容の理解が深化した。つまり、授業では聞き手側には発表部分に関する事前の予習が求められる一方、発表者側には発表内容と方法について入念な事前準備が求められたのである。

表4 質疑応答での発言例

	種類	内容	該当部分
1	疑問	「日本語は方言の違いが大きい」と発表されましたが、本当でしょうか？ 日本の方言は日本人同士なら、たいてい通じる程度の違いだと思うのですが、いかがですか。	二「日本語の多様性」2「方言のちがい」(p.21～)
2	疑問	「日本語には他言語の影響が少ない」と発表にありました。確かに日本語から他言語への影響が小さいというのは分かる気がするのですが、逆に、英語から日本語への影響は大きいように思います。その点についてはどうお考えでしょうか。	三「外国語と日本語」2「外国語からの影響」(p.60～)
3	意見	テキスト34ページに、牧野富太郎の『植物図鑑』が取り上げられ、サルビア、ツキミソウが話題になっています。私には著者の意図がわかりにくかったのですが、発表者はどう思われますか。	二「日本語の多様性」5「官庁用語と学術用語」(p.34～)
4	感想	感想ですが、テキスト63ページからの「洋語の影響」のところ、戦前にローマ字を国字にしようという叫びが盛んだったとのこと、正直、驚きました。本当にそんなことがあったとしたら、日本人は本当に外国の影響を受けやすいんですね。	三「外国語と日本語」2「外国語からの影響」(p.64～)
5	お願い	発表の最後のあたりで「日本語の経済力が世界第4位」という話がありましたが、「日本語の経済力」というところに興味を持ったので、すみませんが、もう少し詳しく説明していただけないか。お願いします。	四「日本語の有力性」1「使用人口の多さ」(p.74の表)

次に、口頭発表後の「発表後プリント」（付録④）及び「発表会記録表」（付録⑤）を基に、口頭発表に対する自己評価、相互評価など評価についてみる。

学生レポートでは、多くの受講者が自身の口頭発表への準備、実際の発表内容や方法、発表後の質疑応答について反省点や改善点を数多く挙げている。精力的に取り組んだと思われる場合は、記述量も多く記述内容も的確であった。しかし、不十分な結果に終わったと思われる場合は「初めての経験で不慣れであった」「十分な準備ができなかった」「この失敗を次に生かしたい」など多くは今回の発表を今後への教訓とするものであった。一方、他者の口頭発表に対する評価は概ね好意的であり、自分とは異なるさまざまな発表に接し評価することを繰り返す中で、望ましい発表の条件が認識され明らかになっていくことになったと思われる。学生レポートの中には、数多くの発表に触れる経験を重ねる中で、個人差はあったけれども、全体として次第に口頭発表の水準が高くなり、洗練されていく実感が得られたとする内容の評言も見受けられた。

4. 考察

今回、筆者は「基礎読書法」における読書とは、娯楽や教養のためのものではなく、文献の内容読解を通して自らの問題意識を持ち、それについて調べ、考えて学ぶ大学生のための基礎技術であるとし、他者に伝えるために文献を読むことを促した。そのため、受講者には文献の分担部分の読解内容に基づき各自でテーマを設定し、それに即した調査や考察を経て口頭発表を行うことを求めたのであった。以下、授業者の立場から口頭発表指導の在り方について考察する。

4. 1 実践の意義

まず、今回の授業実践に際し、文献の読解内容を他者に効果的に伝えるために、適切なテーマを設定し、口頭発表を行うこととし、学習目標を文献読解と口頭発表の2点に絞った。この学習目標の明確化は、受講者にとって学習への大きな動機付けになったのではないと思われる。特に、授業回数に限られている場合は、学習目標及び学習活動を明確化することが有効であると考ええる。

次に、大学での学習に必要な読書力、口頭発表の基礎力を培うという点から、実施時期が1年生前期であったことは妥当であったと思われる。夜間主1年生は同じ前期に、必修のリテラシー科目である「基礎演習」の中で口頭発表の準備・実践について学習することから、それらに関する知識と実践の相互作用を期待できるという点で有益であるといえる。

また、文献の読書法、発表法そのものを今回のように受講者全員を対象に経験的に学ぶ機会を設定し、集中的に実践することは通常の講義科目では難しいと思われる。このため、時間的制約がある中ではあったが、受講者全員を対象とする個人別口頭発表の実践は有意義であったと考える。

4. 2 指導方法

指導方法では、まず、できる限り具体的な解説と助言を行うことを心がけた。主に講義形式の授業を受けている夜間主1年生においては、大学での読書や口頭発表のイメージ形成が十分でないと思わ

れる。このため、第1回の授業では口頭発表の概要について具体的に解説・助言するとともに、今後の大学での学びのイメージ形成を図らせることに重点を置いた。そして、基礎読書法とは何か、学習目標・授業方針、口頭発表の分担部分・担当者・スケジュール、情報収集法、発表の準備物、評価法を明確に伝えることを意図し、学生の視点からの解説・助言を行うことが肝要であると考えた。

次に、口頭発表の分担を「経験者から初心者へ」と配置した。第2回の授業から口頭発表を始めるに際し、1回目は口頭発表の経験があると思われる高学年生に担当させ、1年生に口頭発表のイメージをつかませることを意図した。この点で、高学年生の存在は有益であったといえる。

また、口頭発表法の習得は「無限定から人為淘汰へ」とした。時間的制約がある中で、2回目の発表後、講評を行い、以後の発表について連絡・説明を行った。その際、望ましい口頭発表の方法に関して特別な指導は行わず、2回分の発表を踏まえて「よい口頭発表とはどのようなものか」を各自で考えた上で創意工夫して実践するように促した。その後、受講者なりの工夫と試行が繰り返される発表を経験していく中で、例えば「自分だけが分かればよい」「とにかく報告すればよい」のではなく、聞き手に理解され伝わらなければ口頭発表の意味がないこと、そのためには事前に聞き手を意識・配慮した準備や工夫が必要なこと、それが十分に満たされた発表が「よい口頭発表」となることに自然と気づく結果になった。学生レポートには「大学で初めての口頭発表で難しかった」とある一方で、「今後、必要となる基本的なスキルが身に付けられてよかったと思う」という評言があった。換言すれば、試行錯誤の中から帰納的に「よい口頭発表」の在り方を学んだのだといえる。

以上から、授業者は、支援的立場から丁寧で具体的な解説・助言を行うように心がけること、受講者の学習状況に配慮した授業計画によって受講者の自主的な取り組みを促すこと、そうすることで受講者の気づきと学びを引き出すことが可能となり大きな学習成果が期待できると考える。

4.3 指導内容

指導内容では、まず、口頭発表において各自がテーマ設定を行うことを重視した。文献内容の読解・整理に留まらず、そこから受講者自身が自らの問題意識を持ってテーマを設定するように促したのである。その結果、受講者のテーマとして、例えば「漢字がもたらす日本語の特殊性とは何か」「日本語の文字の並べ方は本当に複雑なのか」「文字の使い分けはどのようにしてできてきたか」「なぜ日本人はことばを省略するのか」などが立てられた。このような疑問文形式による発表テーマを設定させることにより、口頭発表における内容の焦点化を促したのである。

次に、発表の流れ・展開を重視した。発表者による冒頭の名のり、テーマの告知・説明から始まり、実際の口頭発表、まとめ、質疑応答までの展開を時間配分とともに、事前に発表原稿に整理させた(付録②「発表構成表」)。これにより口頭発表を行うことが具体化して現実味を帯び、各自のリハーサル及びそれに基づく修正も容易になったと思われる。

また、発表内容については、既に見たとおり、第3回授業(表1参照)から文献の同一部分を受講者2人ずつが担当して個人別に口頭発表を行うこととした。これにより、発表者及び聞き手にとっては、文献の同一内容に対する発表者2人の読解の観点の相違が意識化されるとともに、内容理解の深化が進んだと思われる。

そして、発表方法については、口頭発表にはレジュメ・板書・プレゼンテーションソフト、それらの組み合わせを試みるように促し、レジュメ印刷やファイル提出についても手順を丁寧に説明する一方で、どのような口頭発表にするかは特に指示せず受講者の判断に任せた。この結果、さまざまな発表方法で口頭発表が行われる中で、単に口頭発表のみでは内容を伝えにくい、受け取りにくい、という点が発表者及び聞き手の共通認識となった。これを受けて、授業者はレジュメ作成を第4回の授業、つまり3回目の口頭発表以降は推奨することに変更し、レジュメの作成手順や準備手順を改めて支援したのであった。

以上から、授業者は受講者の学習状況について形成的評価を行い、必要に応じて、学習の方向づけの手立てを適時に、適切に講じることが求められ、それを実行することで受講者の口頭発表の水準を高めていくことが可能になると考える。

4. 4 指導効果

指導効果について学生レポートをみると、口頭発表に向けて文献内容の読解・整理に加えて、発表原稿作り、配付資料の作成、発表に際しての時間配分、音声や態度面などを通して、これまでなかった「聞き手」への視点を強く意識するようになったという声が多くあった。この点で、受講者がまさに「発表は聞き手に伝えるために行う」という新たな認識を獲得したことがわかる。

次に、質疑応答についてみると、口頭発表後に設けた質疑応答の時間に質疑、意見、感想などの発言を行った受講者は口頭発表の全体を通して25人、これは受講者の69.4%であり、発言回数は延べ44回で1回平均1.2人ということになる^{#5}。しかし、質疑応答の時間が十分に確保できない中でもあり、発言が受講者全員に平均的に見られたというのではなく、意欲的な学生または年長の学生が中心となって積極的な質疑応答が行われたというのが実情である。

また、最終の提出レポートについては、長欠学生1人を除く受講者36人全員が提出した。この結果は、授業者がA4版で両面印刷した計4枚8頁のプリントを事前に配付し、受講者はそこに口頭発表の手順や原稿、発表記録を書き込んでいき、最後にそれを綴じれば完成し、そのまま提出できるという簡便な形式なものに工夫してあったことが一因でもあると考える。

以上から、受講者が個人別に口頭発表を行い、それに即した記録をまとめ、指定された形式のレポートを提出するという明確な授業方式を採用したことが指導効果をもたらしたと考える。

4. 5 成績評価

成績評価は「関心・意欲・態度」「口頭発表の実践」「提出レポート」の3つの観点から行った。

まず、授業への「関心・意欲・態度」の観点に100点中の40点を配当した。

「基礎読書法」の授業は、夜間主時間割の1限目、午後6時から始まる。受講者の中には職場での勤務を終えてから大学に駆けつける学生が一定数存在する。このため、まずは授業への出席及び授業への関心・意欲・態度といった受講・学習状況を配点の上で重視した。出席率95.6%、平均点37.4点の成績は、受講者の授業への関心・意欲の高さに加え、熱心な態度によるものであったと考える。

次に、「口頭発表の実践」の観点には100点中の10点を配当した。

口頭発表は、受講者全員が個別に一人ずつ行うことを授業方針の1つにした。しかし、5回の授業という制約もあり、授業者は口頭発表に向けての十分な事前指導が難しい状況であった。そのため、受講者は相互に数多くの口頭発表を経験する中で、文献の内容理解を図り、口頭発表の方法を学び合っていくという授業展開にならざるを得なかった。このため、配点を低く10点に抑えた。

一方で、授業者は受講者に型どおりの口頭発表を行うことよりも、むしろ各自の自由な発想で口頭発表について工夫したり挑戦的に試行したりすることを大いに歓迎する旨を伝えた。しかしながら、その成績に関しては、最高点が6点、最低点は2点、平均点は4.9点にとどまり、標準偏差（以後、SD）は0.9という結果であり、授業者としては必ずしも納得がいくものではなかった。これは、概して受講者には口頭発表に関する経験知が乏しく、そのような発表準備を行うための時間的な余裕、また心理的な余裕がなかったことに起因するのではないかと考える。

最後に、「提出レポート」の観点には100点中の50点を配当した。

最終課題としての提出レポートを本授業実践の総括と位置づけたことから、配点を50点と高くしたのである。この成績に関しては最高点50点、最低点35点であり、平均点は45.3点と全体的に高いものとなった。SDは8.6である。これは、受講者が与えられたレポート形式や手順に従い、それぞれの口頭発表に対して誠実に取り組んだ結果であるといえる。一方、レポートは提出できたが、その記述内容面については量的または質的な面で課題が残る受講者も一定数ながら存在した。

以上、成績評価の配点にはそれぞれの観点からメリハリを付けた。その結果、筆者担当の5回分の授業の成績は、最高点96点、最低点71点、平均点87.6点、SDは14.6であった。しかし、この成績評価の観点と配点はあくまで試みに過ぎないため、さらに妥当性の検討が必要である。

なお、担当教員3人の各成績の平均から算出した「基礎読書法」の最終成績は、最高点が93点、最低点は69点、平均点は83.5点、SDは7.3になった。また、授業評価アンケートによると、教員の熱意は4.6（全体4.4）、授業外での学習状況（予復習の時間）への5段階自己評価は2.4（全体1.8）、授業への取組みの熱心度は4.3（全体4.1）、主体的に調べ考える姿勢の習得は4.3（全体3.9）、科目に対する総合評価は4.3（全体4.2）であり、授業評価は概して平均を上回るものであった^{注6}。

5. まとめ

本授業実践で、筆者は授業者として、周到な授業計画を立てそれに基づく授業方針を堅持しながらも、受講者の学習状況に柔軟に対応することを心がけた。その中で、受講者は、授業5回分ではあったが、日本語一般論の古典的著作を読み、個人別の口頭発表を数多く経験することを通じて、文献の読解と内容の理解、大学での学びの基礎となる力を養っていったと思われる。

換言すれば、担当授業5回分の中には通常の授業15回分が凝縮されていた。したがって、授業者は今後、授業回数が本授業実践の5回よりも多い授業の場合、また受講者数が37人より少ない授業の場合、口頭発表や質疑応答・講評の時間などを今回よりも長く設定することが可能である。また、レジュメの作成についても一定の時間を配当して指導することが可能になる。そうすることで、本授業実践では必ずしも十分ではなかったそれぞれの学習活動の充実を図り、文献内容を読解・理解し、表現す

る能力を高めることが可能になると考える。

本授業実践の課題として、平成27年度「基礎読書法」の授業概要の後段に掲げられている「書物が担ってきた大きな役割についても学んでいく」ことの達成に向け、新たな授業計画や授業実践のための創意工夫を案出することが残されている。

注

1. 授業で扱った文献は以下のものである。

オムニバス1：西郷信綱『源氏物語を読むために』平凡社（1983）

小峰和明『日本文学史 古代・中世編』ミネルヴァ書房（2013）

オムニバス2：金田一春彦『日本語』（上）（下）岩波新書（1988）

オムニバス3：太田博太郎『日本の建築 歴史と伝統』ちくま学芸文庫（2013）

なお、平成29年度の文化総合系（夜間主）「基礎読書法」のシラバスでは、昼間の言語文化系、地域文化創造系の「基礎読書法」と同様に、受講者自身が人文・社会科学諸分野を中心とした課題図書10冊以上を読み、ディスカッションを行うことを通じて、多様な書物に触れ、本を読むことの魅力に気づくことを目的にし、読書の面白さ、多様な読みに触れる機会として本科目を位置づけている。

2. 読書に関し、文部科学省（2008）は中学校国語1年生で「本や文章などから必要な情報を集めるための方法を身に付け、目的に応じて必要な情報を読み取ること」（C（1）カ）を指導事項としている。また、斎藤（2014:92-93）は「今読んでいる本の内容を、誰かに説明するのだ」と決めることでその内容をしっかりと理解し、整理することが必要になり、集中して的確な読書ができるようになる」と述べている。

3. 一方で、発表レジュメの準備やパワーポイントの使用については、当初、発表者の負担や技量の程度が把握できなかったことから、各発表者の判断に一任した。

4. 司会の役割についても受講者全員に経験させたいと考えたが、分担計画に困難があり、指導時間も確保できないため、今後の課題とした。

5. 長欠学生1人を除く36人対象。数値データは以下、同じ。授業での発言者には「発表会記録表」（付録⑤）内の右端の発言欄に○印を記入させた。

6. オムニバス2のみを対象とする授業評価アンケートは実施していない。なお、その他の評価項目で本科目が全体平均を下回る項目はなかった。また、本科目に対する評言には「3人の先生、それぞれ独自の読書の方法が学べた」「5回ごとに先生が替わるため、充実した講義が受けられた」に対し、「先生が替わるため、それぞれが違う分野からのアプローチであったり、言っていることが違ったりしたので何が正しいか分からない」「各先生の授業に独自性があった面白かったが、もう少し統一してほしい」があった。その他、「報告があったことで、本を読むことの大切さを改めて実感した」「今後、必要となる要約や読み取り方など基本的なスキルを実践的に身に付けられたと思う」「今まで触れてこなかった分野について学べ、新しい分野に興味をわいてきた」「夜間主のことを考えてくれている講義だった」に対し、「あまり興味の持てない分野があり、興味を引く

題材を提供してほしい」「内容が難しくて分からないところが多かった」があった。

参考文献

- 井上次夫（2016）「5コマで口頭発表―夜間主科目『基礎読書法』での試み―」『第22回大学教育研究
フォーラム発表論文集』pp.332-333（京都大学高等教育研究開発推進センター）
- 斎藤孝（2014）『大人のための読書の全技術』中協出版
- 文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説 国語編』東洋館出版

【付録】

① レポート表紙 (略)

② 発表構成表 (序論・本論・結論・質疑応答)

■基本的な構成、展開			
1. 序論＝どんなこと、何について発表するか (発表テーマの提示) なぜ、そのテーマに決めたのか (動機・理由の提示)			
2. 本論＝文献から読み取った内容、分かったこと (調査内容、分析)			
3. 結論＝今回の発表から何がいえるか (テーマに対応するまとめ・回答)			
4. 質疑応答＝聞き手から質問や意見を受けての回答			
構成・展開	時間 分・秒	発表内容・項目・要点など	備考・板書 資料、メモ
1. 序論			

③ 発表原稿用プリント (分担部分・テーマ・内容記述欄)

■分担＝ 章 節「 」	
■発表日(/)	
テーマ _____	
学籍番号	氏名
内容記述	

④ 発表後プリント（自己評価 5 段階・記述評価欄）

自己評価 ○印	良 い 5	概ね良い 4	平均的 3	余り良くない 2	悪 い 1	氏名
★自分の口頭発表＝良かった点、改善点などについての考察						

⑤ 発表会記録表（発表部分・氏名・興味及び疑問記入欄各 1 行・自分の質疑などの発言の有無欄・各回の振り返り記入欄）

No.1	発表会記録表				学籍番号	氏名〔 〕
章・節	番号	発表者名	発表内容で興味を持った点、疑問を持った点など記入	発言○		
3.1	1		興味			
			疑問点			
	2		興味			
			疑問点			
3.2	3		興味			
			疑問点			
	4		興味			
振り返り (記述)						

(いのうえ つぎお・本学教授)